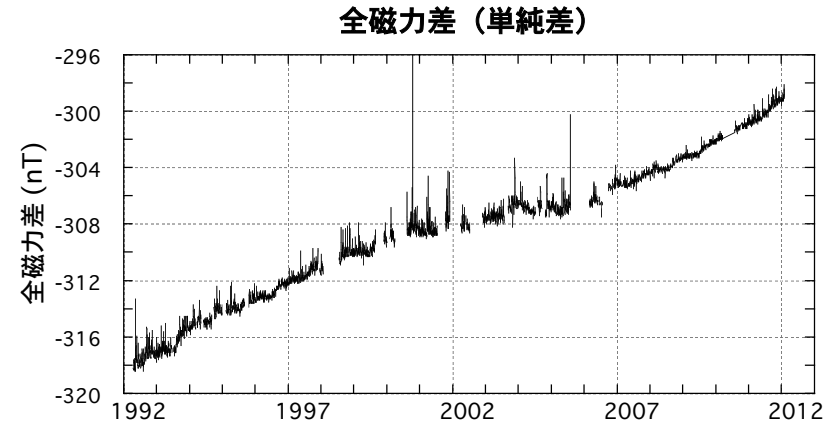
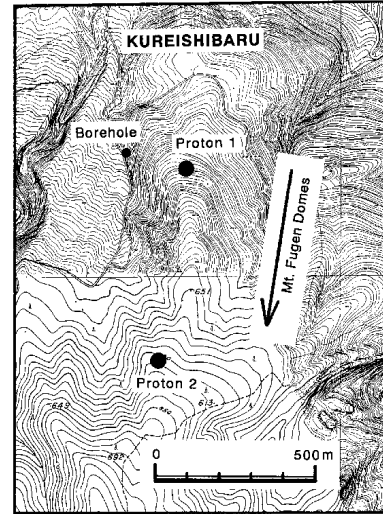
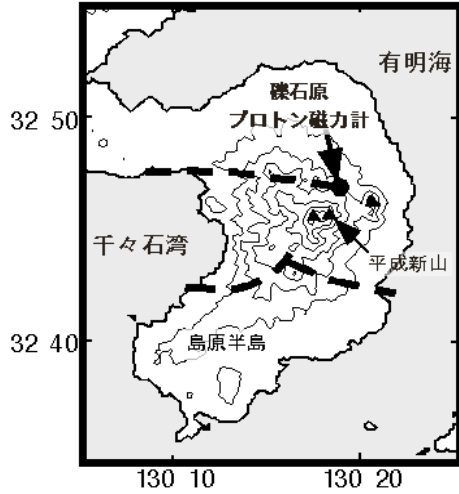
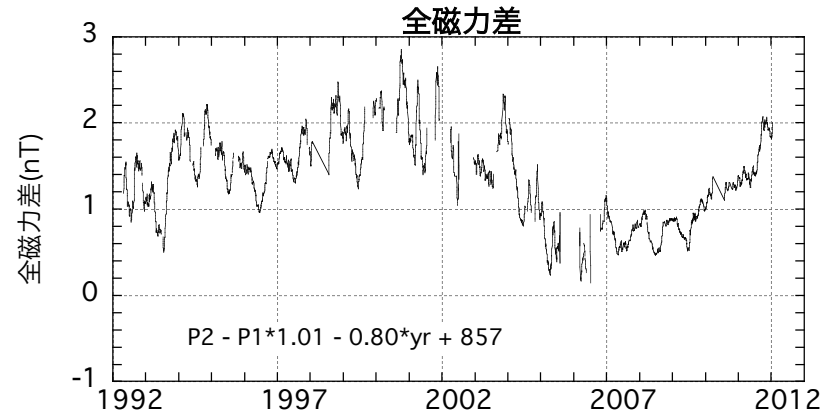
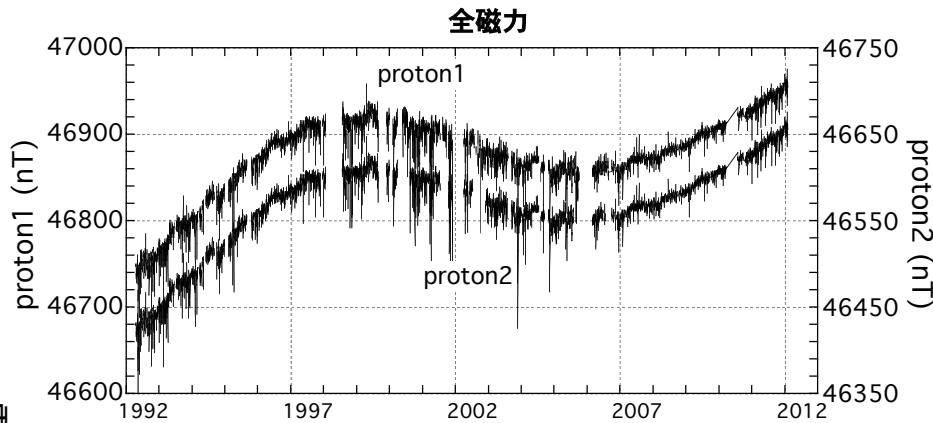


雲仙岳北麓における全磁力変化



単純差では約0.8nT/yrの増加傾向が見られる。さらに両地点には1度05分の伏角の違いがあり、最近の九州地方の地磁気永年変化の影響を受けている。



全磁力を30日間の移動平均値を用いて、ばらつきが最小になるように係数を決めて差を求めた。また0.8nT/yrの経年変化を差し引いた。2000年ごろより全磁力差が減少し、帯磁傾向が見える。2007年以降は全磁力差は横ばい、もしくは磁気の減少傾向が見える。